The Japanese Association of Rehabilitation Medicine

20. リハビリテーション病院における退院患者の動向（自宅退院と施設入所の比較）

ちゅうざん病院リハ科
今村　義典・末永　英文・戸田ゆみ子
仲嶺　時雄・宮良　長和

目的：リハビリ医療の実態としてリハビリ専門病院からの自宅退院と施設入所群の動向について社会・家庭復帰の促進・阻害因子について検討した．対象：1995年1～12月までの1年間にリハビリ治療目的で入院し退院した患者411名中自宅および施設入所群は308名（75%）．結果：年齢別では50歳未満；65%が自宅退院しているのに対して，65歳未満；59%，75歳未満；55%，85歳未満；53%，86歳以上；35%と減少．ADLレベル別では，自立群36/37（97.3%），少介助群101/119（84.9%），多介助群58/84（69.0%），全介助群36/68（52.9%）が自宅退院可能であった．まとめ：阻害因子として1)ADL低下，2)年齢による介護者の変化，促進因子として3)移動能力の確立，4)在宅支援・社会資源の利用，5)ショートステイ入院可能な対応等が考えられた．

21. 町田病院を中心とした総合保健，医療，福祉計画―昭和63年から10年間の総括―

琴海町立病院　森　　俊介

琴海町は，浜村明徳先生指導のものに，長崎県でも早い時期に『地域リハビリテーション』の考え方を導入し，町の保健婦が中心となり，週1回の機能訓練事業を定着させて来た．昭和62年には町立病院に保健活動室を設置し，『琴海町，保健・医療10年計画』を立て，その計画に沿って人的資源，社会的資源を蓄積してきたつもりである（老人保健福祉計画の策定が義務づけられたのが平成2年であるから，それよりかなり早い時期から計画を実行し始めたと自負している）．今年は，その10年目にあたる．これを機会に，この10年を総括し，今後の展望について述べてみたい．

『町づくり』を運動として定着していくためには，住民に理解しやすい基本理念を掲げ，その理念を実現するための具体的な方法とタイムスケジュールを提示しなければならない．そして役場（具体的には，フロントにいる保健婦），社会福祉協議会のヘルパー，町立病院が常に住民のサイドに立っていること，運動を共に担って行く仲間であるということを住民に理解していただくことが最善であると思っている．

今回はわたしたちの運動の基本理念，具体的な行動計画，そして現状について報告したい．また，今後の展開について述べることができればと思っている．

22. 高齢者の在宅ケアに対する医療の関わり―英国との比較検討―

長崎大医療技術短大部　松坂　誠應
国立療養所長崎病院　浜村　明徳
国立長崎中央病院　藤田　雅章

【目的】 在宅ケアに対する医療（特に医師）の関わりを英国サウサンプトン（以下，S市）と比較し検討する．

【方法】 長崎県下11町（以下，長崎）とS市の保健・福祉サービスを利用している在宅高齢者について，その主たるケアスタッフにアンケート調査を行った．対象は長崎では630名，S市では109名で，平均年齢は72歳，68歳であった．

【結果】 脳卒中，骨関節疾患，進行性神経学的疾患，RA，脊髄損傷患者（長崎381名，S市69名）でリハ治療を受けたものは，S市では87%であったのに対し，長崎では50%であった．医師の助言で在宅ケアサービスが提供されたものは，S市では37%，26%であったが，長崎では0.5%と極めて少なかった．ケアスタッフが抱えた問題で「医療情報不足のため不安である」は長崎では50%であったが，S市では全くなった．

【考察】 わが国の医師のリハ治療及び在宅ケアに対する関わりは極めて低く，リハ医の関わりが求められる．

23. 利用者の実態からみた通所サービスの課題

国立療養所長崎病院　浜村　明徳・梅木　義臣
国立長崎中央病院　藤田　雅章
長崎大医療短大　松坂　誠應

【目的】 機能訓練事業，デイサービス事業，老人デイケアの利用状況や目的などに関する調査を行った．

【対象と方法】 対象は，機能訓練165名，デイサービス207名，デイケア120名で，援助者に聞き取り調査

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Rehabilitation Medicine

を行った.【結果と考察】 脳卒中の場合，発症1年未満の利用者が占める割合は，機能訓練43%，デイサービス6%，デイケア22%と，医療のかかわりが期待される発症間もないケースがデイケアに多くなかった. 2)生活自立度は，Jランクが機能訓練とデイサービスで6割強，デイケアで5割弱，デイサービスに自立度の高いケースが，デイケアに低いケースが多かった. 3)利用目的では，デイサービスとデイケアでは，開始時からSocial Activityや機能維持を目的とするケースが多く，利用期間中の目的変化も乏しかった. 両者の活動や援助の在り方が類似したものとなっている可能性が示唆された.【結論】 医療機関のデイケアは最も課題が多いと思われた.

▸▸次号予告 VOL. 34 NO. 3 ◂◂

第33回 日本リハビリテーション医学会 学術集会

■シンポジウム「電気診断学最前線—Physical Medicineの科学性を求めて—」

筋紡錘活動の運動への関与—Microneurogramによる知見—
……国立身障者リハセンター神経内科 長岡正範
脱神経における異常電位の発現に関する研究 ……川崎医大リハ科 椿原彰夫・他
運動単位解析 ……慶應大リハ科 正門由久
経頭蓋磁気刺激 促通と安全性—脳卒中リハビリテーションへの応用に向けて—
……東海大リハ学教室 出江紳一
体性感覚誘発脳磁界 ……国立生理学研究所 柿木隆介

■セミナー

最近の義足の進歩 ……帝京大リハ科 三上真弘
糖尿病の運動療法……東北大医学系研究科障害科学 佐藤徳太郎
障害診断書の書き方……信州大医療技術短大部リハ科 西村尚志

原著

脳性麻痺児における歩行能力の予測に関する研究 ……高知県立子鹿園 平田淳
老齢期の廃用性萎縮筋の機能回復に及ぼす運動負荷の影響
……慈恵会医科大リハ医学教室 山内秀樹・他
受け取り動作における前腕筋群の運動調節に関する基礎的研究 ……慶應大リハ科 長谷公隆

短報

頚髄損傷者の起立生低血圧と持久力に対するメチル硫酸アメジニウムの効果
……箕面市立病院リハ科 逢坂悟郎・他

症例報告

眼筋咽頭ジストロフィー患者の嚥下障害に対する間欠的経管摂食法の利用
……埼玉県総合リハセンター 辻内和人・他

編集の都合上内容が若干異なる場合がありますのでご了承下さい.

NII-Electronic Library Service